

銚子の女学生

—千葉県立銚子高等女学校同窓会誌『河畔』をもとに—

村上 淳子

I はじめに

本稿は、銚子高等女学校の女学生に着目し、女学生の生活環境や卒業後の進路から、銚子における女学生が、地域の中で如何なる存在であり、どのように視られていたのかを、同窓会誌『河畔』の記事を軸に解明することを課題とする。

女子に如何なる教育をほどこすかということは、女性の地位や、どのような女性像が期待されたのかという地域の実情と深く関わっていた。女学校が如何なる生活基盤を持った階層に支えられ、女学生たちが卒業後どのような道を歩いたのかをあとづけることによって、地域における教育に対する考え方や、文化の担い手となった人々を知ることが出来る。そこで、女学生の姿を通して、銚子の近代における女性の歩みの一側面を明らかにしたい。

II 女学生の社会的基盤

海上郡立銚子高等女学校は、大正9年(1920)、実科高等女学校から高等女学校への組織変更によって成立した¹⁾。修業年限は4年で1学年の定員は50名であった。学科は、高等女学校となることで、実科時代の裁縫が減り、随意科として週3時間、英語か教育のいずれかを選択することになった。

明治44年(1911)の実科高等女学校創立当時、校長の今関源十郎は、開校当初生徒が集まらず、郡視学等に協力を仰いでようやく募集人員を確保した。こうした開校当時の様子を、創立以来教頭をつとめた関塚三郎は次のように回顧している。

二月初旬生徒募集の公告を出して、もう来月一日から授業を始めようといふ昨日今日、三月も既に半ば過ぎてゐる。然るに入学願書の受付は未だ募集人員の半数にも満たぬ。(略)所がふと一日応募者のないのは初等教育に関係深い或者が阻止する結果だといふことを耳にした。(略)其の夜焦心苦慮して終夜眠らず、胸中計熟するに及んで忽ち床を蹴て起ち、未だ夜が深いので提灯を点じて家を出た。先づ時の郡視学某氏の門を敲き、告ぐるに突を以てしてその援助を求めたのであつた。之より日夜東奔西走して席温まる暇なく、遂に日ならずして所要人員を遙かに超過する応募者を得るに至つた²⁾

実科高等女学校開校当初は、定員40名に対し、入学者は34名であった³⁾。教師たちは、生徒を集めるため、小学校卒業予定の児童の家を一軒一軒回って入学を勧めることになった。そして、町の人々に女学校の存在を広く知らせることが必要のため、多様な試みが行われた。

先ず本校の存在を町の人々に認識して貰ふ為に、或時は遠足に託つて銚子町の大通りを二列縦隊で、出来るだけ間隔を開けて生徒数の多きを装ひて練り歩き、時には対岸の波崎までも出かけました⁴⁾

しかし、生徒不足の状態は、大正7年頃から変化し、応募者は徐々に増加していった。銚子実科高等女学校への志願者は、第一次世界大戦後急増している(第1図)。学校は、大正8年に40名から50名への定員増をはかり、志願者の増加に対応した。50名の定員に対し、大正8年には107名、翌9年には137名の志願者が女学校を目指した。学校では、大正10年に定員を100名とし、できるだ

け多くの生徒を受け入れるようつとめた。

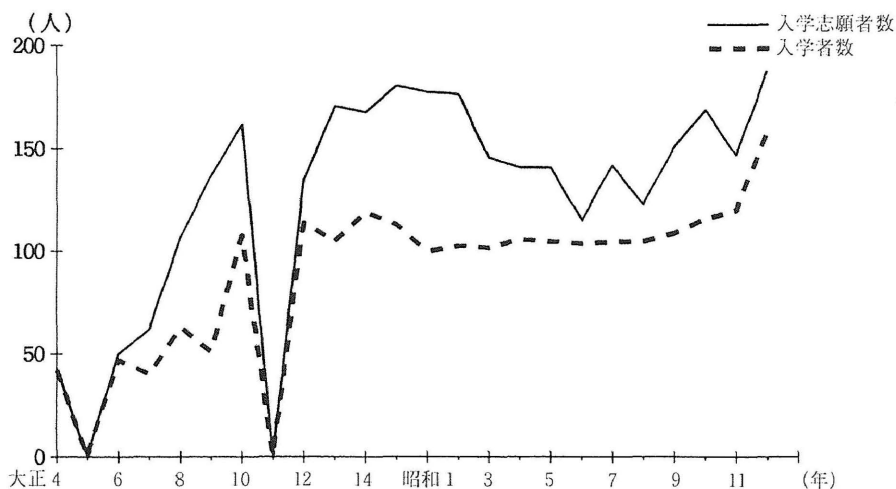
全国の公立女学校の数は、明治43年(1910)に実科高等女学校の設立が許可されたことにより、明治44年の194校から10年後の大正10年には466校となり、約2.4倍に増加した⁵⁾。小学校の義務教育年限が明治41年に6年となり、就学率の男女差がほとんどなくなった明治40年代以降、女子への教育は、地主や都市中産市民といった層の教育熱の高まりによって、全国的な発展をみせていた。

千葉県においても、明治33年に創立し、明治40年まで県内唯一の高等女学校であった千葉高女に加え、明治41年には県立東金高等女学校、翌年には安房郡立安房高等女学校、明治43年には香取郡立高等女学校、君津郡立木更津高等女学校、私立成田高等女学校が設立された。銚子実科高等女学校は、明治43年の「高等女学校令施行規則」にもとづき翌明治44年に設立された。同年、市原実科高等女学校も設立されている。第一次世界大戦による大戦景気の中、女学校への進学熱が高まり、各地に高等女学校が成立したのである。銚子高等女学校は、大正12年(1923)の郡制廃止によって県立の高等女学校となった。

女学校生徒の親の職業は、多くが商業であった。銚子市の昭和12年(1937)の全戸数12,202戸の職業別戸数をみると、農業はわずか7.8%、工業が23.9%、商業が21.3%、水産業が20.2%となっている。銚子市は、商業・工業で全戸数の4割以上を占める町となっていた⁶⁾。

このうち、中等学校へ進学したのは、大部分が商家の子女であった。銚子には、明治33年(1900)創立の銚子中学校が開校していたが、日露戦争後の不況による県費節約の動きなどにより、明治39年に廃校となった後を受けて、明治42年4月より県立銚子商業学校が開校している⁷⁾。銚子商業は、商家が多数を占める銚子の地において、男子の中等教育を担う存在であった。銚子商業学校の大正10年における「生徒父兄職業別」によると、256名の生徒のうち「物品販売業」が107名、また「料理席貸業」8名、「旅人宿業」5名、「製造業」26名、このほか農業が48名、官吏や教員が18名などとなっており、販売業だけでも41%を占めていた⁸⁾。

実科高等女学校生徒の父兄職業は、大正元年の調査では、全生徒175名のうち、商業が75名、農業が33名、工業が22名であった⁹⁾(第2図a)。銚



第1図 銚子高等女学校の入学志願者数および入学者数の推移

(『全国高等女学校実科高等女学校二関スル調査』をもとに作成)

注) 校名は、海上郡立銚子実科高等女学校(～大正9年)、海上郡立銚子高等女学校(～大正12年)、千葉県立銚子高等女学校(大正12年4月以降)。

ただし、大正5年、大正11年は資料欠。

子実科高等女学校と同年創立の市原実科高等女学校の場合、全生徒102名のうち60名が農業であった(第2図b)。全国の女学生16,573名では、農業が40%、商業は27%であった(第2図c)。銚子では、商業関係者および工業関係者の子女が全生徒の半分近くを占めていた。

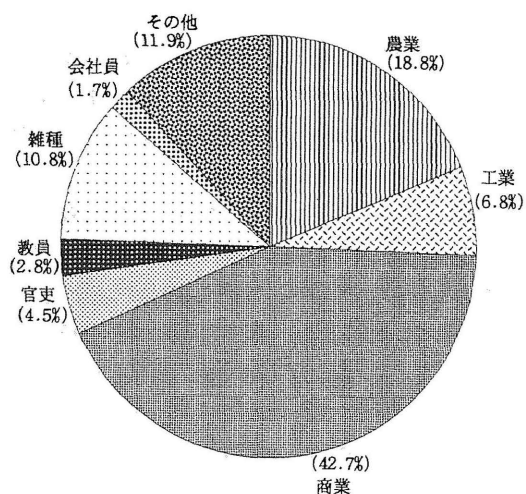
銚子の人口は、昭和8年の市制施行により銚子市となった本銚子町・銚子町・西銚子町・高神村地域では、明治41年には37,550人、大正4年には45,271人、昭和12年には61,538人であった¹⁰⁾。銚子が商業を中心として発展し、人口が増加するの

にともない、女学校を志す人も増加していったのである。

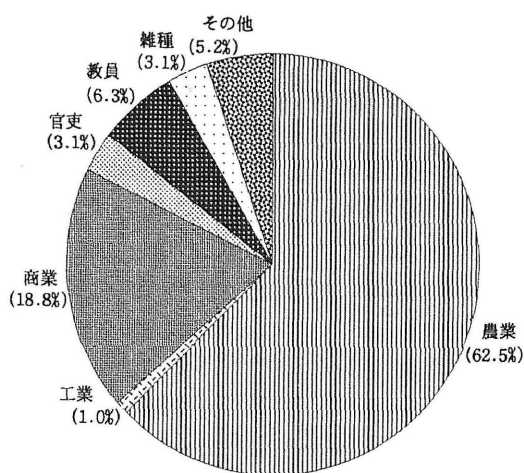
女学校は、明治末から大正にかけての女子教育熱を背に、銚子においても娘を女学校へ進学させて教育することが親の世代にも必要とみなされていった中で生まれたのである。

III 「三本線」の誇り

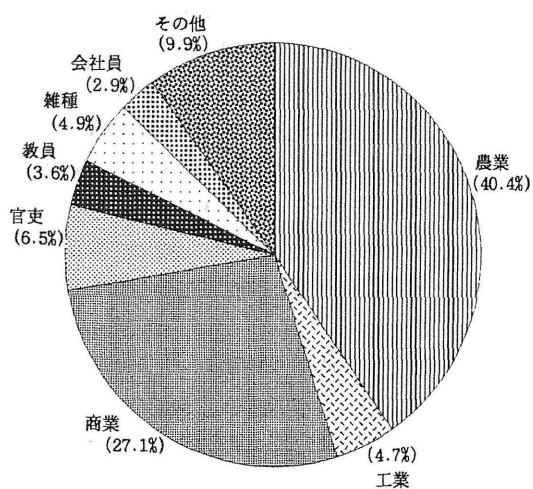
小学校を卒業し、晴れて銚子高等女学校に入学することになった少女達は、袴の裾の3本の白線



a. 銚子実科高等女学校



b. 市原実科高等女学校



c. 全国

第2図 女学校生徒父兄の職業(大正元年度)
(『全国高等女学校実科高等女学校ニ関スル調査』をもとに作成)

にあこがれを抱き、「新しい袴に新しい三本の白線をつけて、意気揚々と校門目がけて押しかけた¹¹⁾」という。ある女学生は、「夢のよう」に思ったという入学の喜びを、次のように述べた。

あのあこがれの白線の三本筋。其の三本線をつけて毎日学校へ通ふ事が出来ると思ひましたら、嬉しくて嬉しくて、両手で胸をいだいて小おどりして喜びました。夕方家へ帰りましたところ母も喜んで、嬉し泣きに泣いてくれました。其のうちに父もお役所から帰つていらつしやいまして大喜びで、「目出度く合格したのだから一生懸命勉強して、立派な女子になつてくれ」とおつしやつて下さいました¹²⁾

袴の裾に縫いつける白線は、校章として定められ、県内の女学校を識別する指標となっていた。千葉や佐倉、松戸は2本、安房、市原は1本、東金は黒い線を2本、木更津は縫いつけないなど、学校によって異なっていた。銚子高女の3本線は、明治44年に実科高等女学校として発足した当時定められたもので、大正初期の服装は、「染緋の八寸位の元禄袖の着物に白線三本を裾に付けた袴を長くはいて、素足に下駄履き¹³⁾」という格好であった。3本の白線は、昭和4年にセーラー服が制服となってからも、セーラー衿とスカートの裾に縫いつけることとして受け継がれていった。

実科女学校から銚子高等女学校となってからは、一層入学志願者が増加して受験競争の様相を呈するようになっていた。女学校を目指す小学生は、受験に備えて小学校の先生のもとで「夜学」などと呼ばれた補習を受け、入試に臨んだ¹⁴⁾。入学試験による選抜が行われただけに、難関を突破して入学したという喜びもひとしおであった。

生徒は、銚子町出身者がおよそ半数近くを占め、次いで本銚子町出身者が占めていた。明治44年の実科高等女学校創立によって廃校となった銚子技芸学校の生徒は、実科女学校の第3学年に編入となった。この学年では、本銚子町出身者はわずか2名であったが、一つ下の学年では11名となり、以

後銚子町とほぼ同じくらいの数となった¹⁵⁾。女学校の生徒は、銚子町・本銚子町の出身者でおよそ6割から7割を占めていた。その他、銚子「近在」の八日市場や旭、小見川、波崎方面の生徒もあった。茨城県側の波崎町や矢田部村、若松村などからの通学生は、渡船で松岸まで渡り、さらに鉄道を乗り継いで通学していた。銚子高女は、利根川対岸の地域とも深く結びついていた。匝瑳方面の生徒は、総武線で通っていた。通学できない者は、寄宿舎を利用した。昭和10年頃、寄宿舎には20人ほどの学生が生活していた¹⁶⁾。

学費は、大正期には1円50銭であったが、昭和に入ると恐慌のあおりで値上げが続き、昭和2年には一ヶ月3円50銭から3円80銭に、昭和4年には4円10銭となった¹⁷⁾。女学生の多くは、親から5円もらって授業料や後援会費を合わせた4円90銭を払い、おつりの10銭を楽しみにしていた。この他教科書代は1冊1円、さらに文房具費や衣服の費用、修学旅行の積立金なども必要であった。

銚子高女は、銚子の「文化の源泉¹⁸⁾」として親しまれていた公正会館とも深い関わりを持っていた。ヤマサ醤油の濱口儀兵衛が私財を投じて大正13年に設立した公正会館には、図書館が併設されており、女学校ではこの図書の一部をかりうけることになっていた¹⁹⁾。

また、学校では、公正会館で催される講演会を生徒に聴講させていた。公正会館では、『少年世界』の編集長で童話作家の巖谷小波による講演(昭和2年4月)や、生活改善同盟会理事をつとめていた塚本はま子の「家庭生活の合理化講話会」(昭和4年11月)、東京割烹女学校長をつとめた秋穂敬子の料理に関する講演(昭和5年1月)が開かれ、生徒たちは、公正会館へと出掛けて講演を聴いていた²⁰⁾。講演の他、映画の見学なども行われていた²¹⁾。

講演会や映画上映会の開催は、大逆事件後本格化した通俗教育において取り入れられたものであった。銚子においては、通俗教育のための講演会や図書館経営などが明治末年以降行われており²²⁾、後に公正会館がこうした催しの会場となっていた。

公正会館の活動は、明治末から大正にかけて行われた通俗教育の施策に添うものであった。卒業生の中には、「公正会館の婦人講座の聴講生になって、週に一度づつ有益なお話を伺つて居ります」という者もあった²³⁾。女学生や卒業生は、こうした活動に参加し、通俗教育の普及をうながしていた。

学校でも同窓会主催による講演会や音楽会などが毎年開催されていた。大正14年(1925)8月には、テノール歌手藤原義江の独唱会が行われている。料理や洗濯に関する講習会のほか、ハリウッド美容室の美容師を招いた「整容講習会」(昭和9年8月)なども開かれ、こうした講習会には卒業生も参加していた²⁴⁾。公正会館や学校で開かれた催しは、東京で活躍する人々によって最先端の文化がもたらされる契機でもあった。それ故、卒業後も聴講しようという者が見られた。

学校行事や同窓会、教員の動静などは、『河畔』と題する同窓会誌に記された。

銚子高女の国語教師として昭和9年(1934)まで教鞭を執り、かたわら同窓会誌『河畔』の編集に力を注いだ一教師は、単に『会報』であった同窓会誌の表題を『河畔』と命名し、「婦人雑誌的、文芸雑誌的の情味ある編集」を目指し、『河畔』の編集は、私の教師生活中唯一の慰安であり、熱意の坩堝であつた²⁵⁾と振り返っている。

『河畔』は、「論説」欄を設けて女学生の主張を述べる場となったほか、卒業生の近況を知らせる手紙をほとんど掲載していたようで、在校生のみならず卒業生による小説や詩、短歌などの作品も多数掲載された。発行当初は、東京の印刷所に依頼しており、発行部数は、昭和10年以降1,500部から2,000部を数えていた²⁶⁾。同窓会誌の制作を担当していた雑誌部では、教師の自宅を訪ねて話を聴く「家庭訪問記²⁷⁾」などの企画を組んだり、「女の為に²⁸⁾」、「男性への抗議²⁹⁾」などのテーマで特集記事を募集し、在校生のみならず卒業生にも広く寄稿を求め、内容の充実をはかっていた。

銚子実科高等女学校創立以来大正15年まで15年にわたって校長を務めた今関源十郎は、長生郡に

生まれ、明治41年まで千葉高等女学校の教諭を勤めた人物であった³⁰⁾。銚子に来たときは38歳で、海上郡における新しい女学校の校長として、請われて来銚したのであった。その後校長を継いだ吉野誠治は、千葉女子師範学校教頭であった。女学校には、出来るだけ優秀な教師陣を集めようとしていたことがうかがえる。

生徒たちは、学生ならではの目で、教師にあだ名をつけていた。「師の影を踏まず」と教えられながらも、教師は生徒たちにとって堅苦しいだけの存在ではなく、尊敬の対象であるとともに、親しみを感じさせる存在として映っていた。

教頭を「顔が丸くて赤い」ことから「トマト」と呼んだり、数学の教師を身体の大きさから「カバ」と呼んだり、あだ名は学生たちが教師を呼ぶ暗号のようなものでもあった。

「ナフタリン」と呼ばれた国語の教師は、赴任した当初は24歳の新米教師で、授業では石坂洋次郎の『若い人』を読んだり、短歌を作ったりしていた。あだ名の由来は、「虫がつかない」ということで、年齢が近く好奇心旺盛な生徒たちにとって興味がつきなかつたのであろう³¹⁾。また、図書部の顧問でもあった地理・歴史科の女性教師は、「紫式部の君」と呼ばれ、生徒の憧れの的であったという³²⁾。音楽を担当した女性教師は、「椿姫」と名付けられた³³⁾。

大正12年(1923)に郡制が廃止され、女学校は郡立から県立へと移管された。生徒数も増加し、学校の規模が大きくなる中、校舎の新築移転が行われたが、講堂がなく、その建設がのぞまれた。昭和10年に計画が具体化し、昭和13年3月1日に落成記念式典が行われている。工費総額は16,800円にのぼった³⁴⁾。卒業を前に、講堂が完成した喜びを、4年生の生徒が次のように述べている。

朝の冷めたい空気の中に、やはらかなクリーム色の新講堂が、さんざんと輝く朝日にはえて、黒い森の向ふに赤い瓦と半分の胴体を表して、一きわ目立つて見える。私はそれを見るとき登校の歩みも一層はずんで、あの美しい、そして大きなクリーム色の新

講堂は私達の学校なのだと思ふと、急に自分の胸が
ずんずんふくらんで来るやうな気がする³⁵⁾

女学生たちは、銚子高女の学生であることに誇り
をもちつつ、勉強やスポーツに打ち込む一方、
将来の自分を見つめる時期を女学校で過ごしたの
である。

Ⅳ 卒業をむかえて

女学校ですすめられた家事教育は、裁縫・手芸
などの実習を重視し、そうした実習を通して良き
家庭を営む主婦たるにふさわしい技能を備えた女
性を育成しようとしたものであった。女学校は、
家事科や裁縫科を重視することによって、実生活
に役立つ技術習得の場という意味を持ち得た。こ
うした実習重視の教育は、娘に中等教育を授けたい
という親たちに意義のあるものと考えられたこと
により、女学校が一つの受け皿となっていった
のである。

女学生は、卒業後家の手伝いをしながら裁縫な
どを習いに行き、やがて結婚を迎えるという人が
多数であった。

千葉県最初の高等女学校として創立された千葉
高等女学校の場合、大正元年から7年までの627
名の卒業生の調査では、「家庭にある者」が256名
で全体の40.8%を占めていた³⁶⁾。ちなみに、既婚
者は35名、また、各私立裁縫学校入学者が151名、
小学校教員が98名、共立女子職業学校入学者が44
名、日本女子大学入学者が18名などとなっている。

銚子実科高等女学校では、大正2年から7年ま
での卒業生194名のうち、「家事見習中の者」は68
名で、全体の3割ほどであるが、既婚者の76人を
合わせると全体の74%となる³⁷⁾。銚子実科高女
の卒業生の場合、千葉高女の卒業生よりも早い年
齢で結婚しているのがわかる。このことは、女学
校卒が結婚の条件とみなされ、結婚相手として望
まれたことで、卒業生の多くが卒業後4、5年以
内に縁付いていたことによる。

また、卒業後小学校教員となったのは27名で

あった。女学校を卒業しただけの教員は、正教員
ではなく、待遇の低い代用教員であった。女学校
出の代用教員が求められたのは、女子の就学率が
上昇し、それにとまなう女教員の確保が急がれた
からにはかならない。代用教員は、教育費を低く
抑えたい町村財政にとっても都合のよい存在で
あった。勤務先は、銚子小、本銚子小、西銚子小、
高神小などのほか、海上、飯岡、三川、豊浦、豊
岡、瀧郷、船木、椿海などの各小学校、さらに波
崎の小学校などで、多くは出身校への勤務であっ
た。女学生は、卒業後地元小学校の教員となるこ
とが期待されていた。

大正の半ば頃になると、東京の学校や千葉女子
師範学校の二部などに進学する者もあらわれてい
る。代用教員として働いていた人の中にも、師範
学校の二部に入り、さらに専攻科で専門を究めた
上で教員の資格を得ようとする人もあらわれてき
た。すぐに教員になる人が減少し、教師としての
専門的な勉強を志して進学する者が年々増えてい
た(第3図)。

大正9年3月に卒業した卒業生の中には、11名
の小学校教員の他、共立女子職業学校や女子美術
学校に進んだ者がいた³⁸⁾。共立・女子美の二つ
の学校は、銚子高女の生徒に人気の高い進学先で
あった。

大正15年3月には90名の卒業生が学窓を巣立っ
た。そのうち進学したのは12名、小学校の教員と
なったのは2名であった。進学先は、日本女子大
学、実践女学校、東京家政学院、日本女子商業学
校、東京女子専門学校、女子美術学校、共立女子
職業学校、渡邊裁縫女学校、千葉女子師範学校二
部などであった³⁹⁾。

これらの進学先のうち、大正14年に大江スミに
より設立された東京家政学院は、生徒一人に一台
のコンロを設置するなどの最新の設備を誇る「花
嫁学校」として知られ、地方出身者も多かった。
こうした設備を備えた学校であるだけに、大正15
年当時、学費は年98円を要した⁴⁰⁾。

上級学校への進学は、経済力のある家の子女で
なければかなわなかった。商家の中でも経営規模

が大きく、銚子商工会議所の役員に名をつらねているような有力な商家、すなわち大里家、笠上屋、水戸屋、飯嘉本店などの経営規模であれば⁴¹⁾、日本女子大や山脇高等女学校、東洋英和女学校などをはじめとする東京の学校への進学が可能であった。こうした家々は、町の名士であり、他の家とは異なる名士にふさわしい高い教育を娘たちにほどこすことが求められていた。また、ヤマサやヒゲタの重役クラスの子や、医師の娘で跡を継ぐ人、旭や八日市場の地主の娘などが、卒業後東京の学校へと進んでいた。こうした家の娘たちには、女学校以上の教育が求められていたのである。

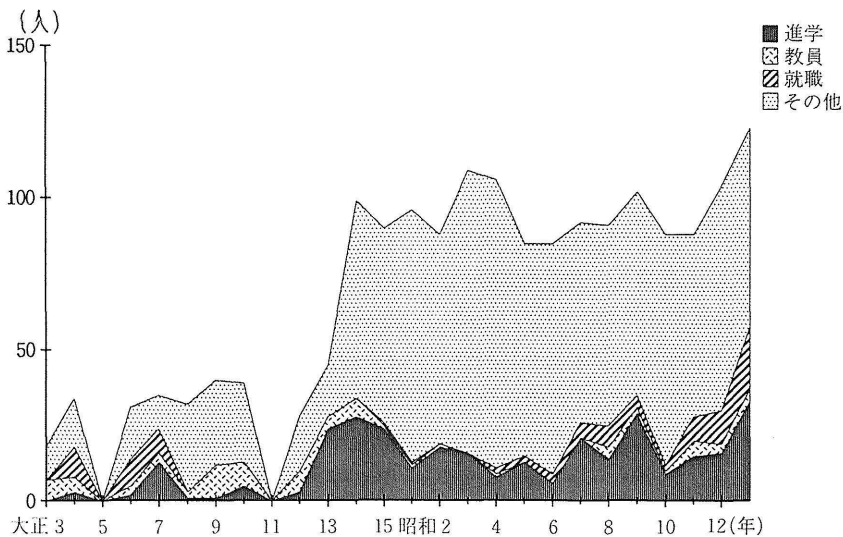
昭和2年(1927)3月に卒業した96名のうち、10名が進学した。3名は、千葉県立女子師範学校の二部へ進んだ。その他、実践女学校、女子美術学校、共立女子職業学校、日本女子大、大妻技芸学校、渡邊裁縫女学校、東京女子薬専へは、それぞれ1名ずつ入学した。1年間の母校の補習科へは15名入学している⁴²⁾。大妻技芸学校、渡邊裁縫女学校は、より高いレベルの家事や裁縫の技術の取得を目指す学校であった。女学校卒業後、こうした学校へ進む人が増えてきたのは、より高い知識

を備えた女性が求められ、女学校卒業だけでは結婚の条件として不十分と考えられるようになってきたことによる。

大正から昭和初期にかけて、女学校卒業後さらに学校に進みたいという希望を持つ者が増えていた。しかし、昭和恐慌のため進学を断念する者もいたためか、進学者の数は大正末から減少していた(第3図参照)。濱口雄幸内閣の緊縮財政演説は、銚子高女にも影響を与え、生徒たちによる「緊縮」に関する作文もみられる⁴³⁾。昭和6年には、4年生の京都・奈良・伊勢方面への修学旅行が取りやめとなっている。

不況ということもあり、進学など論外、女学校卒業でたくさん、という親の声も多かった。ある女学生は、同窓会誌に「卒業前の回顧」と題する文章を寄せ、自分の希望と現実が相いれないことを嘆いている。

「女なんかそんなに上へ進んでもだめだ——卒業したらお花かお裁縫でも習へばたくさんだ、それにこんなに兄弟がたくさんあるのに——」一はじきに否定されてしまった。「ほんとうに卒業したらもつとも



第3図 銚子高等女学校卒業生の進路

(『全国高等女学校実科高等女学校二関スル調査』をもとに作成)

注) 校名の変化は第1図に同じ。ただし、大正5年、大正11年は資料欠。

つと上の学校へ進んで勉強して行きたい」⁴⁴⁾

ある生徒は、「もっと学校へ」と思いながら、「そんなに学問ばかりしてどうするんだい？」という祖母の言葉にたじろぎ、「先生にするんならとにかく、女が家に居るのに、そんなに勉強ばかりさせなくてもよいだろう」という親の声に不満を抱いた⁴⁵⁾。また、西村伊作が大正14年に開いた文化学院に入学した自分の姿を空想し、「西条八十氏だの、吉屋信子さんだのの御講義がきかれる⁴⁶⁾」ことにあこがれを抱く文学少女の姿もみられた。東京や千葉などへの進学は、経済的に余裕があることはもちろん、何より親の賛成がなければかなわなかった。東京へ行くことには、「東京へ行つたといへば、人がきいてもきゝづらくないからなあ⁴⁷⁾」という親の声も反映していた。

卒業生の中には、「見習」として他家へ家事手伝いに行く者もみられた。末広町の濱口儀兵衛の屋敷地は、紀州と往来していたことから、銚子に本籍を移してから「ヤマサの別荘」と呼ばれ、女学校卒業後ここへ「見習」に行く者もいた。銚子の人々の目には、「別荘の奥さんは、当時銚子婦人の尊崇の的で、ヤマサ別荘に行儀見習に行つた娘さん達は、皆、模範的な婦人に仕立てられ、夫々立派な奥さんになっておられます⁴⁸⁾」と映り、「見習」は意義あるものと考えられていた。「見習」に娘を預ける家は、銚子の中でも由緒ある家に限られ、誰でも「見習」に行けるわけではなかった。

「見習」のために、東京へ行く者もいた。ある女学生は、昭和13年3月に卒業した後、「見習」のために東京・高輪の賀陽宮家につとめた。当時石炭・コークスなどの「山持ち」であった賀陽宮家の暮らしぶりは、「超高級」なものであったという。そのため「普通の生活が出来なくなる」と考え、1年ほどで「見習」を辞している⁴⁹⁾。中には、小石川の徳川慶久公爵家や永田町の近衛文麿侯爵家へ行った者もいた⁵⁰⁾。

こうした、いわゆる「行儀見習」には、礼儀作法などを身につけるという目的のみならず、「見

習」先の家に結婚相手を紹介してもらえるという期待が込められていた。「見習」先が名家であれば、紹介される嫁ぎ先も名家であり、結婚によって家の格の上昇をはかることが出来るとされた。

昭和10年3月に卒業した102名の中には、千葉県出身の杉野芳子が校長を努めていたドレスメーカー女学院、日本文華裁縫学院などに進む者もみられた。進学先には、専門的な知識や技術を得るための学校も多くなっていた。この年、7名の就職者があった。昭和10年以降、進学先に技術を身につけるための学校が増えてきたほか、就職する者があらわれてきた。

昭和12年度の卒業生では、進学したいという声に加え、「職業婦人」になりたいという希望を抱く者が増えていた。「今の女性は何か一つ腕に覚えがなくてはならない⁵¹⁾」との必要を感じ、裁縫や手芸の技術を身につけたいと考える者もいた。卒業生の中には、保姆や産婆、看護婦、歯科医、薬剤師などを目指して東京女子薬学専門学校や東京女子医学専門学校、東京女子歯科専門学校、千葉女子師範学校保姆科、帝大医学部看護婦養成所などへ進学する者もみられた。

昭和13年3月の卒業生では、就職した人が13名であった。就職先は、銚子醤油株式会社、銚子信用組合、銚子駅前郵便局、東電銚子営業所など、銚子市内が主であり⁵²⁾、町の人々も女学校卒業者を雇い入れるようになっていた。翌年の昭和14年3月の卒業生では、26名が進学し、就職は21名であった。主な就職先は、銚子醤油株式会社、第百銀行銚子支店、日立製作所、中島飛行機製作所、日本油肥株式会社などであった⁵³⁾。

卒業生の中には、東京高等蚕糸学校へ進み、八日市場の千葉県蚕業試験場に勤めるという者や、資生堂や日本赤十字社などに勤め、東京で働くという者もあらわれていた。「腕に覚え」を持つことを考え、「職業婦人」を目指して就職する者が次第に増加していた。女学校では、女学生たちの自立への眼が育っていったのである。

V 女学生たちの足跡

女学生たちは、卒業後さまざまな人生を歩んでいた。

大正10年3月に銚子高等女学校を卒業し、豊岡小学校で教鞭をとった後、大正12年に女医を目指して東京女子歯科医学専門学校に入学した卒業生は、歯科医専在学中に「職業の女」と題する文章を書いた。ここには、職業を持って自らの道を行き、女としてどう生きるかという問いを抱く姿がみられる。

世の中の男はよく女に対して斯く言ふ、『女のくせに生意気な、何がまとまつたものが出来るものか』など言ふ(略)此の言葉は婦人を非常に侮辱してゐる、憤慨に堪えない。今後の男子には此の言葉を出すものはだんだん少なくなること、信じてゐる。男ばかりの世の中ぢやないのだ。男あつての女、女あつての男、持ちつ持たれつする世の中なのだ、(略)男女は車の両輪である。男ばかりでも廻らなければ、女ばかりでも廻らない。(略)生活のため職業の女となつて稼ぐのも、目的は将来出世を心懸て総て妻となり、母となる覚悟で女の道を進まねばならない⁵⁴⁾

この言葉から、歯科医となることについて、さまざまな困難を乗り越えなければならなかったことがうかがえる。この卒業生は、昭和2年に歯科医専を卒業した後、「卒業後直に千葉医大で研究する筈でしたが女性の研究生は入れぬとて遂に研究することも出来ませんでした⁵⁵⁾」という。その後、女子歯科医専の付属医院で研究を重ねていた。昭和7年には、南洋マーシャル諸島の地に移って2年、「九月に一児を得ました」、「歯科の方も開業してから一年近くになります」と近況を知らせている⁵⁶⁾。歯科医を開業して職業を持ち結婚して子供を産んでも、独身時代に記した「一つの仕事を完全に成し遂げる⁵⁷⁾」との思いで働いていた。

犬吠崎灯台の職員を父に持つ銚子高女第9回卒業生は、卒業後一年間補習科に在学した。父の不

幸のため母とともに上京し、逋信省に勤務して「職業生活」を続けていたが、視力を失ってしまう。この卒業生は、昭和6年に『河畔』に寄せた手紙の中で、「医師のすゝめにより盲学校へ九月から入学致し将来生活にたつ準備として鍼灸マッサージの方面に進むため学んで居ります⁵⁸⁾」と近況を告げている。

こうした卒業生の歩みは、『河畔』によって知ることが出来る。「会員諸姉の近況」欄には、結婚して子供を育てていることや、学校生活の様子を記した手紙が掲載された。女学校卒業後、重い荷を背負うことになりながらも、身一つで生きていこうとする卒業生の姿もあった。

『河畔』誌上の「会員諸姉の近況」欄には、商家や旅館に嫁いだことや、学校の先生或いは銀行員と結婚したこと、ヤマサやヒゲタの社員と結婚して銚子市内に住んでいること、婿養子を迎えたことなど、近況を告げる卒業生の手紙が掲載された⁵⁹⁾。その中には、結婚によって銚子から出ていってしまう人も多かった。家事や育児、また店の切り盛りなどをする忙しい日々を送りつつ、母校や同級生を気遣う手紙は、卒業後何年たっても、また、銚子から遠く離れた地にあっても、女学校で学んだ4年間の思い出を心の糧として生きていこうとする姿を映す鏡なのである。

VI おわりに

銚子高等女学校には、主に銚子の町中の商家や公務員、会社員、医師や教員、付近の地主などの娘が在籍していた。有力な商家では、娘を女学校卒業後さらに進学させ、積極的に教育をほどこしていた。女学校は、こうした商家を軸とする階層に支えられ、銚子の中での地歩を固めていった。

女学校は、女学生たちが卒業後進学し、職業を得て働いたり、或いは「見習」などの形で社会に踏み出す足がかりとなる場であった。

銚子には、飯沼地域に大正5年(1916)に設立された本銚子町立実科女学校があり、高等女学校とは異なる教育を展開していた。この学校を支えた

階層も、銚子高女とは異なっていたと考えられる。本報告では、この本銚子町立の実科女学校に学んだ女性たちの姿については描くことが出来なかった。銚子において二つの女学校が開校されていた背景を、町の発展や時代状況をふまえつつ明らかにし、銚子における女学生の全体像を描くことを今後の課題としたい。

付 記

本報告を作成するにあたり、松本笑子さん、永澤つる子さん、千葉県立銚子高等学校司書の椎名義子さんには、現地調査の際にたいへんお世話になりました。また、堀籠之助さん、堀静子さん、笠上和子さん、伊東たねさん、伊東照子さん、高根照代さん、高根益太郎さん、安井照子さんには、聞き取り調査にご協力いただきました。以上、記して深く感謝申し上げます。

註

- 1) 銚子高等女学校の前身は、海上郡立工業補習学校(明治34年創立)であった。同校は、翌35年郡立銚子染織学校、同42年郡立技芸学校と改称し、44年実科高等女学校設置にともない廃校となった。郡立銚子実科高等女学校は、大正12年に県立に移管し、千葉県立銚子高等女学校となった。
- 2) 関塚三郎(1933)：思ひ出すことども、『河畔』第9号、千葉県立銚子高等女学校校友会同窓会(千葉県立銚子高等学校所蔵、以下、『河畔』は号数のみを示す)、19ページ。
- 3) 千葉県海上郡立銚子実科高等女学校(1913)：『千葉県海上郡立銚子実科高等女学校要覧』、同校、93ページ。
- 4) 関塚三郎(1938)：「創立当時の思ひ出 一明治四十四年頃一」、『河畔』第14号、41ページ。
- 5) 高等女学校の校数・生徒数については、高等女学校研究会編(1994)：『高等女学校の研究』、大空社参照。
- 6) 銚子市編(1956)：『銚子市史』、銚子市、551ページ。
- 7) 銚子中学校の設立および廃校問題については、創立五十周年記念誌編集委員会編(1987)：『創立五十周年記念誌』、銚子市立銚子高等学校 参照。
- 8) 今津源太郎編(1922)：『銚商』第1号、銚子商業学校銚商会、「生徒父兄職業別生徒数」。
- 9) 文部省普通学務局(1911～1940)：『全校高等女学校実科高等女学校ニ関スル調査』(復刻 大空社1992年)による。
- 10) 前掲6)、541～551。
- 11) 床枝とく(1928)：卒業前の回顧、『河畔』第5号、69ページ。
- 12) 山内ハナ(1936)：女学校へ入学して、『河畔』第12号、83～84。
- 13) 丸島照子(1951)：想い出、『河畔』第18号(創立四十周年記念号)、26ページ。
- 14) 松本笑子さんからの聞き取りによる。
- 15) 千葉県海上郡立銚子実科高等女学校(1913)：『千葉県海上郡立銚子実科高等女学校要覧』、同校、94～95。昭和期の生徒出身地は、以下の通りである。

銚子町 本銚子町 卒業生総数			
昭和4年	28	23	109
9年	32	19	90
14年	34	25	114

 (銚子高等学校所蔵各年の卒業アルバム生徒住所により算出)
- 16) 永澤つる子さんからの聞き取りによる。
- 17) 千葉県立銚子高等学校六十周年誌編集委員会編(1972)：『創立六十周年記念誌』、千葉県立銚子高等学校、109ページ。
- 18) 松本昌夫(1927)：編集後記、『河畔』第4号、101ページ。
- 19) 伊東 文(1938)：図書部のことなど、『河畔』第14号、65～66。
- 20) 「学校日誌」、『河畔』第4号(1927)、14ページ、および「学校日誌」、『河畔』第6号(1930)、87ページ。
- 21) 昭和9年6月30日には、「非常時日本」「武人の妻」「東郷元帥国葬実況」「公正会館ニュース」などが上映された(「学校日誌抄」、『河畔』第11号、131ページ)。
- 22) 千葉県教育百年史編さん委員会編(1973)：『千葉県教育百年史』第1巻、千葉県教育委員会、1397～1402。
- 23) 川島玉枝(1927)：会員諸姉の近況、『河畔』第4号、84ページ。
- 24) 「学校日誌」、『河畔』第9号(1938)、106ページ。
- 25) 松本昌夫(1938)：「河畔」伴奏曲、『河畔』第14号、64ページ。
- 26) 宮本栄一郎(1951)：旧校舎の四年間、『河畔』第18号、15ページ、および宮本(1936)：編集後記、『河畔』第12号、201ページ。
- 27) 雑誌部幹事(1936)：家庭訪問記、『河畔』第12号、59～69。
- 28) 『河畔』第3号(1926) 所収。

- 29) 『河畔』第10号(1933) 所収。
- 30) 「送迎の言葉」『河畔』第3号(1926), 1ページ。
- 31) 松本笑子さんからの聞き取りによる。
- 32) 前掲17), 360ページ。
- 33) 前掲17), 359ページ。
- 34) 後藤秀總(1937): 工事報告, 『河畔』第14号, 9ページ。
- 35) 鈴木濱子(1937): 講堂に寄する, 『河畔』第14号, 79ページ。
- 36) 千葉県教育委員会編(1941): 『千葉県教育史』第5巻, 687ページ(復刻 青史社, 1979年)。
- 37) 前掲36), 692ページ。
- 38) 「会員消息」林達也編『会報』第1号(1921), 林達也, 52~66。
- 39) 「新入会員」林達也編『会報』記念写真号(1925), 林達也, 84~87。
- 40) 東京市役所編(1926): 『東都学校案内』, 三省堂, 359ページ。
- 41) 雨谷茂民編(1940): 『銚子商工案内』, 銚子商工会議所 参照。
- 42) 「新入会員」『河畔』第4号(1927), 72ページ。
- 43) 「象牙の塔に齧く緊縮論と家庭論」『河畔』第6号(1930), 57~64。
- 44) 熱田クニ(1931): 私の現在, 『河畔』第7号, 39ページ。
- 45) 石橋あい(1928): 卒業前の苦悩を回顧して, 『河畔』第5号, 70ページ。
- 46) 郷えい子(1928): 卒業前の苦悩を回顧して, 『河畔』第5号, 73ページ。
- 47) 宮本千代(1931): 苦悶の表徴, 『河畔』第7号, 90ページ。
- 48) 大根真吾(1970): 古いヤマサのことども, 外岡松五郎『銚子回顧』, 信太書店, 112ページ。
- 49) 永澤つる子さんからの聞き取りによる。
- 50) 「会員諸姉の近況」『河畔』第8号(1928), 112ページ および「同窓会通信」『河畔』第11号(1930), 111ページ。
- 51) 高橋喜代(1937): 学窓に綴る私の設計図, 『河畔』第13号, 52ページ。
- 52) 「本年度卒業生の動静」『河畔』第14号(1938), 168~169。
- 53) 「新卒業生状況」『河畔』第15号(1939), 88~89。
- 54) 椎名たつ(1926): 職業の女, 『河畔』第3号, 26ページ。
- 55) 椎名たつ(1928): 会員諸姉の近況, 『河畔』第5号, 106ページ。
- 56) 川上たつ(1932): 会員諸姉の近況, 『河畔』第8号, 116ページ。
- 57) 前掲54), 26ページ。
- 58) 大村カツ(1932): 眼の見えぬ乍らも, 『河畔』第8号, 9ページ。
- 59) 卒業生の中で婿養子を迎えたという人は, 特に商家に多い。この点については, 中野 卓(1964): 『商家同族団の研究』, 未来社 参照。